

博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	石 黒 圭
論 文 題 目	日本語の文章理解過程における予測の型と機能
審査要旨	
<p>本論文で考察の対象とする予測は、「当該文を読んで感じられる不全感を後続文脈で解消しようとする理解主体の意識の働き」とされる。つまり、理解主体の意識の働きが予測なのであって、次に来る内容が何なのか積極的に想像をめぐらす働きを指すものではない。また、それは、「当該文との関係のなかで次に来そうな後続文脈の候補を絞る理解主体の心的な活動」とも定義される。このように、予測を緩やかで柔軟なものと考えることによって、本論文では理解主体の意識の働きを言語学的に解明することを目的とする。すなわち、本研究は、それ以前の心理学や人工知能の試みと異なり、言語学的な立場から文章理解における予測をとらえることを意図するものである。</p> <p>言語学で予測の研究が遅れた理由を、本論文では、予測という概念そのものの不明確さ、予測の研究方法の難しさ、文章・談話レベルの予測の軽視の三点に起因するものとして論じる。そして、研究方法に関しては、実験・内省・コーパスによる三方法のうちコーパスによる研究が最も有効だと判定し、コンピュータによる大量データの共起関係の分析を中心としている。この試みは完成されたとは言えないが、本研究の一つの特徴となっている。また、一文を超える長い談話を予測の単位として対象とすることも、本研究の特色である。このように、本研究は方法論的にも明確な意図を持った意欲的なものとなっていることが認められる。</p> <p>本論文は、10部（第Ⅰ部－第Ⅹ部）21章（第1章－第21章）から構成される。</p> <p>第Ⅰ部「文章理解と理解過程」および第Ⅱ部「先行研究における予測の考え方」では、総論として、文章分析をおこなうさいに文章の理解過程を組みこむことの重要性を述べるとともに、これまでの研究動向の分析が行われる。第Ⅰ部の第1章「本稿の目的と構成」と第2章「文章理解の考え方」では、文章の理解過程を文章分析の方法に組みこみ、文章の理解が短時間でおこなえるのがなぜかということ明らかにするモデルを構築する必要があるとし、「当該文そのものの理解→後続文の予測→先行文との関係の理解→当該文そのものの理解→後続文の予測→……」という文章理解のモデルをとおし、予測という観点が文章を分析するさいに不可欠であることを論じている。第Ⅱ部「先行研究における予測の考え方」の第3章「予測にかかわる先行研究概観」では、これまで国内外でおこなわれてきた予測研究を「言語学における予測研究」と「心理学における予測研究」とに分け、さらにその両者を海外の研究と国内の研究に区分し、それぞれの研究動向を紹介している。</p> <p>第Ⅲ部「本稿の予測の考え方」では、第4章「本稿で扱う予測の範囲」で、予測の定義や種類、予測研究の方法について述べ、第5章「予測の類型」では、予測のしくみを論じるには、三つのレベルの予測、およびその下位類型を明らかにする必要があるということ論じ、第6章「調査の方法」では知覚的にはとらえがたい予測という活動を可視化する研究方法について考察した。第5章の三つのレベルの予測とは、当該文と後続文の関係を予想する「関係の予測」と、後続文の具体的な内容を予想する「内容の予測」（＝「具体的内容の予測」）に二分され、さらに「関係の予測」が「関係連続の予測」と「接続関係の予測」の二つに分かれることが述べられる。「関係連続の予測」は、一連の場面や話題によって構成される意味的なまとまりの連続性・非連続性を問題にするものである。それにたいし、「接続関係の予測」は、文連続の意味的な連続性を前提に、当該文と後続文の論理的な関係を問題にするものである。この二つの「関係の予測」を丹念に記述することで、文を単位とする理解における「後続文脈の展開パターンの予測」の姿を明らかにできることが論じられている。</p>	

第Ⅳ部「関係連続の予測」、第Ⅴ部「接続関係の予測」、第Ⅵ部「内容の予測」の3部は、いわば本論文の骨格となる中心部を構成する。第Ⅳ部「関係連続の予測」では、文の意味的連続を生み出す起点となる「設定」(第7章)、文の意味的連続の帰着点となる「終了」(第8章)が重要であり、これによって連続する文の意味的なまとまりが認識されていることを検討している。第Ⅴ部「接続関係の予測」では、当該文の情報の欠落感を充足・解消する「充足系」、話の進展を予測する「進展系」、類似の内容が継続することを予測する「類似系」の三つに大別され、その下位類型である「成分の説明の予測」(第9章)、「文の説明の予測」(第10章)、「理由の予測」(第11章)、「順接の予測」(第12章)、「逆接の予測」(第13章)、「並立の予測」(第14章)の六つが後続文脈の文脈展開を限定して理解するうえで大きな役割を果たしていることが明らかにされる。さらに、第Ⅵ部「内容の予測」の第16章「具体的内容の予測」では、後続文脈の内容が具体的に予測できる場合について論じている。

とりわけ、第Ⅴ部「接続関係の予測」の考察は圧巻である。例えば、第12章「順接の予測」では、順接の予測が、変化を引き起こしうる出来事の結果を予測する「外界の出来事→結果」、当該人物が周囲の対象や状況に働きかけた結果を予測する「外界への働きかけ→結果」、当該人物が周囲の対象や状況から働きかけられたさいの対応を予測する「外界からの働きかけ→反応」、当該人物の意志の実現を予測する「内面からの働きかけ→実行」、当該人物が他の人物へ働きかけたさいの相手の反応を予測する「他の人物への働きかけ→反応」、当該人物が他の人物から働きかけられたさいの対応を予測する「他の人物からの働きかけ→対応」、必然的な論理展開を導きうる前提からその論理的帰結を予測する「必然的論理展開」、特定の判断や感情を誘発しうる前提からその主観的な態度を予測する「主観的論理展開」の八つに分かれることを示している。接続関係の基本となる順接関係にこれだけ詳細な分析が加えられたことはこれまでなかったとあって過言ではない。

第Ⅶ部「予測の精度」、第Ⅷ部「外れた予測と理解」、第Ⅸ部「予測と文章」の3部は、いわば本論文に対して、それを補強したりその周辺の問題を掘り下げたりする役割を有する。第17章「予測の精度と形態的指標」では、予測を誘発する形態的指標は多岐にわたっており、その種類によって予測を誘発する力は異なることなどを論じた。第18章「外れた予測を下地にした理解」、第19章「予測を外すレトリック」では、予測が的中しなかった場合でも、それが理解に生かされたり、理解主体の創造的理解につながったりすることを示した。第20章「文章全体の理解とグローバルな予測」では、文を単位とする予測は、当該文の直後にある後続文を予測しているだけでなく、後続文脈の展開や結末などを予測し、文章構造全体の理解に役立てていることを論じた。これにより、本論文の考察そのものにふくらみを持たせることができた。

第Ⅹ部「総合的考察」の第21章「本研究のまとめ」では、本稿で論じてきたことを整理するとともに、文章理解の際の単位の問題、調査の理解と現実の理解の乖離の問題などに論じた。

以上にみたように、本論文は文章理解における理解主体の予測という行動を考察の中心に据え、それを総合的に考察した初めての言語学的な成果と言ってよい。なお発展の余地は残すものの、文章研究に新境地を開拓した論文として、博士(文学)の称号に値すると判定するものである。

公開審査会開催日	2008年 1月 12日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	文学学術院・教授		野村 雅昭
審査委員	日本語教育研究科・教授		佐久間まゆみ
審査委員	名誉教授		中村 明
審査委員	名誉教授	博士(文学)	森田 良行